

清水 勲著

漫画の歴史



岩波新書

172



清水 勲著

漫画の歴史

岩波新書

172

清水 勲

1939年東京に生まれる

1962年立教大学理学部卒業

現在—日本漫画資料館館長，川崎市市民ミュージアム
専門研究員，文京女子短大講師

著書—「ビゴー日本素描集」(編，岩波文庫)

「ワーグマン日本素描集」(同)

「ビゴー素描コレクション」(全3冊，共編，岩波書店)

「近代漫画」(全6冊，共編，筑摩書房)

「漫画雑誌博物館」(全12冊，編，国書刊行会)

「日本漫画の事典」(三省堂)

「諷刺漫画人物伝」(丸善)ほか

漫画の歴史

岩波新書(新赤版) 172

1991年5月20日 第1刷発行 ©

1991年6月10日 第2刷発行

著者 清水 勲

発行者 安江 良介

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発行所 株式会社 岩波書店

電話 03-3265-4111(案内)

定価はカバーに表示してあります

印刷・理想社
製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN 4-00-430172-6

はしがき

日本人ならだれでも知っている「鳥獣人物戯画」(京都・高山寺所蔵、国宝)は「鳥獣戯画」ともいわれ、四巻から成っている。それらは平安後期(十二世紀半ば)から鎌倉前期(十三世紀半ば)にかけて制作されたものだという。とくに甲巻は擬人化された蛙・猿・兔などが登場し、その描写の見事さと諷刺の卓抜さで日本漫画の原点ともいえるべき傑作である。その作者と伝えられる鳥羽僧正の名は、江戸期に登場する戯画スタイル「鳥羽絵」の語源となり、近世から近代の社会において現代の「漫画」を意味する言葉として使われていた。

平安後期から室町後期にかけては「餓鬼草紙」(二巻、京都国立博物館・東京国立博物館所蔵、国宝)、「地獄草紙」(四巻、奈良国立博物館・東京国立博物館他所蔵、国宝)、「百鬼夜行絵巻」(一巻、京都・大徳寺真珠庵所蔵、重要文化財)など戯画史上で見のがせない名作が生み出された。だが、こうした肉筆絵巻はごく限られた人々が楽しんだにすぎない。漫画が民衆のものになるのは、版画技術を利用した複製美術として出されるようになってからである。

その華々しいスタートは、享保年間(十八世紀初頭)に大阪に登場した日本最初の漫画本であ

る「鳥羽絵」本によって飾られる。以後、『狂画苑』(牧墨僊)、『北斎漫画』(葛飾北斎)、『漫画百女』(合川珉和)など数々の傑作戯画本が生まれてくる。本という形式だけでなく浮世絵の一分野としても戯画・諷刺画は数多く描かれる。とくに天保期から幕末にかけては、幕政批判の諷刺画が盛んに描かれ、幕藩体制弱体化の進行がそうしたものからも裏付けられる。

漫画が真に民衆のものになるのは、ジャーナリズムの中に発表の場を得てからである。とくに近代的印刷技術によって発行される新聞・雑誌への登場によって、漫画の社会に与える影響力は格段に大きくなっていく。発行部数やその速報性が版画の時代とは比較にならないものになったからである。日本に複製美術としての漫画が登場して二八〇年、ジャーナリズムの中に入場して一三〇年になる。本書はこうした複製漫画の歴史を紹介するものである。漫画がどのような道をたどって今日の形をなしてきたか、その間、漫画は何を表現してきたかをその象徴的な事例でみていこうと思う。

漫画の歴史は画家と読者、そしてその間に立つ編集者・出版者がつくり出してきたものである。その歴史にドラマがあるとしたら、一つには、この編集者たちの漫画にかけた情熱があげられよう。C・フィリポン、野村文夫、宮武外骨、加藤謙一らが漫画をどのように画家に描かせ、読者にどのように結びつけたかこそが、ある意味では漫画の本質を物語るものなのである。明治の思想家、福沢諭吉・中江兆民・幸徳秋水たちと漫画との意外なかわりも、近代社会に

おける漫画の機能を知る上で興味深い。本書はそうしたエピソードを通して漫画というとりとめもない世界の一端を知ってもらおうとしている。

複製美術としての漫画は、「一枚絵漫画」あるいは「カートゥーン」といわれる分野を中心に発展してきた。本書はその歴史から派生した「コマ漫画」「ストーリー漫画」にもふれるが、一枚絵漫画の二大ジャンルといわれてきた政治漫画・風俗漫画の変遷を視点の中心においている。したがって、戦後漫画を語る終章においても、今日、日本で全出版部数の三分の一を占めるといわれるコミック、すなわち長編のストーリー漫画の世界について、その詳細を語るまでにはいたっていない。その点をご承知いただきたい。

漫画史における主要な作品・出版物・文献については巻末の年表にまとめてある。また、本文で記述されている主要作家の略歴についても巻末に索引を兼ねて紹介している。この年表と人物略歴は本文の記述不足部分をカバーするためのものである。

漫画の精神は本来、「遊び」と「諷刺」の要素から成っている。しかし、現代の日本漫画の特徴を一口に言うと、「遊び」としての機能が肥大し、「諷刺」としての機能が弱まってきたという感がある。とくに一枚絵の諷刺画（カートゥーン）の分野は迫力を失っているような気がする。日本の現代美術の中で最も活気にあふれた分野の一つであり、海外にもその存在を知られ出したのがアニメやコミックを中心とする漫画である。しかし、その成り立ちや変遷については意

外と知られていない。

漫画が現代ほど日常生活に深く入り込んできた時代はなかった。その意味で一度、漫画の歴史を振り返ってみるべき時期が来ているのではないだろうか。本書がそのためのガイドとなれば幸いである。

一九九一年三月

著 者

目
次

はしがき

- 1 諷刺画・権力・大衆 1
——一八三〇年代のパリと江戸——
- 2 「漫画」という言葉 15
——誕生から定着まで——
- 3 『パンチ』と『ジャパン・パンチ』 29
——架け橋となったワーグマン——
- 4 自由民権期の漫画 53
——政治を痛撃した人びと——
- 5 中江兆民とビゴー 81
——漫画雑誌の謎を推理する——
- 6 ヒーローは語る 103
——時代を映す人気者たち——

| | | |
|----|-----------------------------------|-----|
| 7 | 長篇ストーリー漫画の誕生 ——岡本一平と活動写真—— | 119 |
| 8 | 子供漫画の時代 ——推進役をはたした講談社・中村書店—— | 133 |
| 9 | 戦争と漫画 ——国策遂行の要請の下で—— | 151 |
| 10 | 大阪という発信地 ——鳥羽絵から劇画まで—— | 165 |
| 11 | 戦後漫画の潮流 ——コミックの隆盛、一枚絵漫画の低迷—— | 181 |
| | 日本漫画史年表(江戸時代〜現代) 漫画関係人物略歴(兼索引) | |

1 諷刺画・権力・大衆

——一八三〇年代のパリと江戸——

日刊「シャリ
バリ」の創刊

一八三二年十二月一日、パリで日刊の新聞『シャリバリ』が創刊された。「シャリバリ」(charivari)とは「(いやがらせのために)鍋釜をたたいて騒ぐこと」を意味し、その言葉が象徴するように諷刺画を売り物にする新聞であった。主宰者はシャルル・フィリポン(一八〇〇—一八六二(図1)という漫画家あがりのジャーナリストで、彼は二年前の一八三〇年十一月四日にも週刊の諷刺新聞『カリカチュール』(Caricature II 漫画・諷刺画の意)を創刊し、成功を収めていた。したがって『シャリバリ』の創刊は事業の拡大を意味していた。

十八世紀ヨーロッパの漫画・諷刺画は銅版画による表現が主流であったが、それは製作に時間とコストのかかるものであった。これに対し、十八世紀末にドイツで発明された石版画技術は、石版の表面に石鹼・脂肪を含む液で文字や絵を書いて製版し、水と油の反発性を利用して印刷する、一種の平版印刷で、銅版を針や刀で彫ったり、酸で腐食させる銅版画技術よりもは



図1 シャルル・フィリポン像 ベンジャマン筆 1838年

るかに速く量産できるものであった。この技術はイギリスで実用化が進み、ナポレオン戦争の時代が終わる一八一五年にはフランスにも移植される。そしてフランス人は、この石版画技術をジャーナリズムの中に導入することを考え出す。

一八二九年六月、最初の漫画新聞「シルエツト」(Silhouette＝影絵)がバルザックや「近代新聞の父」といわれるエミール・ド・ジラルダンの後援のもと、ラティエとアシル・リクールによって創刊される。しかしこの新聞は、フィリポンの『カリカチュール』が登場すると間もなく廃刊になる。フィリポンの方が事業家として卓越していたのである。

それでは、フィリポンが、週刊そして日刊の諷刺新聞の発行を事業として成功させた要因は

何だったのだろうか。その成功は、実は石版画技術に目をつけたことだけではなく、もう一つの奇抜なアイデアがもたらしたものであった。

国王の顔を梨形で

フィリポンが『カリカチュール』を創刊したのは、ルイ・フィリップ(一七七三—一八五〇)が即位した二か月後のことであった。この新しい国王はフランス革命のとき国民軍に参加した経歴がある。オルレアン家の出であるため一七九三年、王位をねらうが失敗して米国に続いて英国に亡命。一八一七年、王政復古となって帰国。そして一八三〇年七月の革命で王位につく。当初は民意を重んじる政治をめざすが、成果が上がらず次第に反動化してくる。これはフィリポンにとってツキの始まりだった。ルイ・フィリップの統治が諷刺画のテーマとして絶好のものとなったからである。

フィリポンはH・ドミエ、J・G・グランビル、P・ガバルニ、H・モニエ、N・T・シヤルレ、A・G・ドカンなど数多くの画家たちに、ルイ・フィリップとその統治する社会の矛盾を諷刺画に描かせ、それが評判を呼んで『カリカチュール』は部数を拡大していった。しかし、フィリップの行政はいつこうに改革されず、もっと手厳しくフィリップをたたく必要に迫られていた。

フィリポンの頭に一つのアイデアが浮かんだ。王の顔が西洋梨(ポアール=poire)には「間抜け」「とんま」の意味もある)に似ていることから、王の顔を梨の形で描く諷刺画(図2)を画家



図2 梨頭のルイ・フィリップ ドーミエの作品のヒントになった
フィリポン筆の原案図 1831年

たちに依頼したのである。この梨頭の諷刺画は、たちまち読者の反響を呼ぶ。それは『カリカチュール』の名物となり、部数をさらに拡大させた。「フィリポン対フィリップ」(Philippon contre Philippe)といったキャッチフレーズも同紙に生まれた。こうして読者の支持に自信のついたフィリポンは、日刊紙『シャリバリ』の創刊にふみきったのである。『シャリバリ』の紙面にも梨頭の諷刺画が頻繁に登場した。そしてこの時代、フランスのいたるところで「今日の『シャリバリ』を読んだかい」とか「今日の梨頭はどんな調子だい」といった挨拶言葉が飛び交

うくらしいの「梨頭」ブームを起こしたのである。

ヨーロッパ
中の評判に

この『シャリバリ』の人気はヨーロッパ中の評判となり、イギリスの『パンチ』(一八四一年創刊)、ドイツの『フリーゲンデ・ブラッテル』(一八四五年創刊)、『クラデラダッチ』(一八四八年創刊)などの漫画新聞の創刊を促す。『パンチ』は副題に「ロンドン・シャリバリ」と付け、『シャリバリ』の威光を借り受けていた。十九世紀中葉のパリは西洋漫画ジャーナリズムの中心地となったのである。『カリカチュール』は一八三五年、発禁によって終刊したが、『シャリバリ』はフィリポンの死後も刊行が続き、一九二七年に終刊した。

一八三〇年代の『カリカチュール』や『シャリバリ』がフランスの民衆の中に深く浸透していった理由の一つは、それらが、人口の多数を占める字の読めない階層にも政界や社会で起きていることを知らしめたからであろう。諷刺画という絵が伝える情報が大衆を動かすものになっていた。それは、一八四〇年以降に登場する写真、あるいは一八九五年以降に登場する映画がはたす役割りの一つをはたしていたのである。

ホガース 「近代漫画」は近代社会が生み出した漫画を意味するが、それは主として版画とい
と著作權 う複製美術として表現され、大衆に購入してもらおうことを目的に生み出された。し



図3 居眠りする会衆 ウィリアム・ホガース
1736年

たがって、それ以前の時代の漫画に比べて商品としての性格をいっそう強めていった。そのため、生み出す側に著作権への意識が生まれてくる。

近代漫画、すなわち版画による大衆向け商品としての漫画で、しかも著作権を主張するものが最初に誕生したのは『シャリバリ』の創刊からさらに百年ほどさかのぼる十八世紀のイギリスである。産業

革命がはじまり、いち早く近代社会へ突入するイギリスでは、まずウィリアム・ホガース(一六九七—一七六四)が近代漫画の基盤をつくる役割をはたす。彼は産業革命がはじまる直前の社会を諷刺銅版画で活写し、人気を得る。「娼婦一代記」(一七三二)、「放蕩息子一代記」(一七三五)、「当世風結婚」(一七四五)といったシリーズ諷刺画や、教会を諷刺した「居眠りする会

衆」(一七三六)(図3)、アルコール中毒者の激増を描いた「ジン横丁」(一七五〇)などがよく知られる。

人気が出るにしたがって、ホガースは自分の作品の海賊版や劣悪・安価なコピーの出現に悩まされた。そこで一七三五年、彼は国会に、版画の下絵画家や原版保有者の著作権を保護するよう請願書を提出した。そして同年、著作権法が議会で可決された。これは「ホガース法」ともいわれ、この法律によって絵画制作者の地位が大きく向上し、このあとギルレー、クルークシャンク、ローランドソンなどのすぐれた諷刺画家たちを生み出すことになる。ホガースの登場によって、イギリスが最初の近代漫画を生み出す国になったのである。

石版技術と 木口木版

こうしたイギリス漫画の刺激を受けて、フランスでもフランス革命期(一七八九—一七九九)あたりから、諷刺画が言論戦の一手段として登場しだす。それらの多くは銅版画・手彩色銅版画で、街角で売られたが、弾圧を恐れたアングラ出版的なものも多かった。それらの中にはマリー・アントワネットの情事を春画風に諷刺したものもあり、巷の話題を呼んだ。

フランスが近代漫画の時代を迎えるのは、ナポレオン時代が一八一五年に終わり、イギリスとの交流が再開され、産業革命が徐々に社会に浸透しはじめてからである。十八世紀末にドイツで発明され、イギリスで実用化がはじまっていた石版技術が入ってきて、前述のようなジャ